研究

刑務所ラジオにみる「承認」のコミュニケーション
―受刑者とDJへのインタビューから

Communication of “Approval” in Prison Radio: Interviews with Prisoners and DJs

キーワード：
　刑務所ラジオ，ナラティヴ・アプローチ，ケア・コミュニケーション
keyword：
　prison radio, narrative approach, care communication

名古屋大学大学院情報学研究科　芳　賀　美　幸
Graduate school of Informatics, Nagoya University　Miyuki HAGA

要　約
　本研究の目的は，刑務所で受刑者の社会復帰支援を目的に放送されているラジオの音楽リクエスト番組における，リスナーが番組の聴取とメッセージの投稿を通じて番組に参加する意義と，DJとリスナー間のコミュニケーションの様相を明らかにすることである。名古屋刑務所豊橋刑務支所で放送されている番組「リクガメ」を対象として，受刑者の聴取実態について質問紙調査を実施し，受刑者とDJにインタビューを行った。結果をナラティヴ・アプローチとケア・コミュニケーションの視座から考察したところ，（1）リスナーはメッセージの投稿を通じて，自身の生活や人生を省察し，自己の物語を作り上げていると示された。この時，メッセージテーマとリクエスト曲が，物語の筋立てを手助けしていた。さらに投稿者だけでなく，聴いているだけのリスナーも，他者の物語を自身に照らし合わせ，自らの物語を更新する手がかりとしている可能性が示唆された。（2）DJとリスナー間のコミュニケーションは相手に対する承認が基本にあり，リスナーの語りを後押ししていた。語り手にとって自己の物語を語り，他者に承認されることは，自己を肯定されることの喜びや安心感を与えてくれるとともに，犯罪や暴力の連鎖から抜け出して新たな自己を生きる手助けとなる可能性を有しているという点で，ケアにつなが

原稿受付：2023年４月18日
掲載決定：2023年10月24日

る可能性がある。本研究は，社会から孤立しがちな受刑者をケアし，包摂するメディア・コミュニケーションの可能性を示した。

Abstract

The purpose of this study was to clarify the significance of listeners' participation through listening and sending messages in the context of a radio program broadcast to support prisoners' reintegration into society. Attention was also paid to communication between DJs and listeners. A questionnaire survey on prisoners' listening tendency was administered regarding the "Rikugame" program broadcast at the Toyohashi Penitentiary Branch of Nagoya Prison. Prisoners and DJs were also interviewed. In this paper, the results are discussed from a narrative approach and the care communication perspective. The results showed the following. Firstly, through sending messages, listeners reflected on their lives and created biographical stories . Secondly, the themes of the messages and the requested songs helped develop story plots. Furthermore, it was suggested that persons listening to others' messages compared the stories others shared to their own and used them as clues to update their own narratives. Thirdly, the communication between DJs and listeners was based on mutual approval, which encouraged the listeners' storytelling. For the storytellers, telling their stories and receiving approval from others may have been valued because the affirmation brought them joy and peace of mind and helped them break the cycle of crime and violence and live a new life. Hence, this study revealed media communication's potential as a means to care for and include prisoners who tend to experience social isolation.

1　はじめに

刑務所ラジオとは，刑務所の職員や地元のコミュニティFM局によって，受刑者の社会復帰支援を目的に制作され，多くの場合，所内限定で放送されている音声番組である。札幌，府中，富山，松本，岡山，山口，福岡など，各地の施設で実施されている。多くがリスナーから音楽のリクエストとメッセージを受け取り，コメントを返すという「DJスタイル」であり，受刑者は聴取とメッセージ投稿を通じて番組に参加している。

本研究では，刑務所ラジオにおいて，リスナーが番組に参加する意義と，DJとリスナー，リスナー同士のコミュニケーションの様相を明らかにすることを目的とする。受刑者を取り巻く環境を踏まえた上で，番組参加の意義をナラティブ・アプローチとケア・コミュニケーションの視座から考察する。メディアを単なる情報の媒介物ではなく，自己の物語を語る場（加藤，2015，小川，2015）としてとらえたとき，刑務所ラジオがリスナーにとって自己を省察し，物語る場となりうる可能性を明らかにする。

2　研究背景

2.1 「沈黙」の刑務所

日本の刑務所の特徴は，沈黙である。人権団体ヒューマン・ライツ・ウォッチは，1995年の報告書で，日本の刑務所では，受刑者は人と接触する機会を奪われ，大きな音を立てることが禁じられ，懲罰の対象になることさえあると指摘している。

沈黙を強いる刑務所のシステムの根底には，受刑者の人間性の軽視がある。そのことが世に問われるきっかけとなったのが，2001～2002年に名古屋刑務所で刑務官が受刑者を死亡させた事件である。事件を契機に，受刑者の処遇に関する監獄法が改正され，受刑者の人権の尊重を定めた刑事収容施設法が新たに施行された。刑務所の役割も，罪を犯した者に「懲らしめ」を与えるよりも，刑期を終えた後に円滑に社会復帰し，再び罪を犯さずに生きていくための支援が重視されつつある。

法改正から二十年近くが経とうとしているが，刑務所の状況は根本的には変わっていない。受刑者は刑務作業中や食事中は原則，会話は禁止されており，自由に会話できる時間は限られている。安田（2020）は，社会において他者とのコミュニケーションが極めて重要であるにもかかわらず，刑務所では他者と接する機会が圧倒的に少ないため，受刑者は自らの意思を表示することができず，そのことが出所後に対人関係のトラブルにつながったり，生活再建のために必要な福祉サービスなどにつながることを阻んでいると指摘している。

一方で，他者との対話を通じて，受刑者の人間的な成長を促そうとする試みもある。「治療共同体（Therapeutic Community：TC）」というアプローチが，欧米を中心に広まっており，日本でも導入されつつある（毛利・藤岡，2018）。TCで重要視されているのが，自身の感情を感じ取り，理解し，表現する「エモーショナル・リテラシー」の習得だという（坂上，2002，2022）。自分自身がいま何を感じているのかを分からず，感情を言葉にできない状態においては，暴力が表現手段になりかわってしまうことがある。他者との対話の中で，自分の感情を理解し，適切に表現できるようになることで，暴力という手段に頼らずに生きていけるようになると考えられている。

このように，受刑者のコミュニケーション機会を確保し，他者との関わりの中で自己の感情を理解し，表現する能力の獲得が，改めて注目されるようになっている。

2.2　刑務所ラジオにおける受刑者の参加

刑務所ラジオは，日本だけでなく，イギリスやアメリカ，オーストラリアなど欧米諸国でも放送されており，海外ではオルタナティブ・メディアや市民メディアの視座から研究が進みつつある。

中にはリスナーを受刑者に限定せず，広く一般の人々に向けて放送されている音声番組も含まれる（Prison Radio International, 2021, Anderson, 2012）。

イギリスでは，イングランドとウェールズの100以上の刑務所で番組を放送するラジオ局「Prison Radio Association」が，公共放送 BBC とパートナーシップを結び，受刑者がプロのラジオプロデューサーと番組を作っている。 受刑者によるラジオ制作は，社会復帰に向けて当事者の視点から有効な情報の提供につながる（Bedford, 2018）と同時に，受刑者が読み書きや ICT のスキル，コミュニケーション能力を高める機会になる（Bedford, 2018, Wilkinson and Davidson, 2008）。また，ドイツの刑務所で受刑者が制作するポッドキャストを分析したKiernan（2021）は，受刑者に自身の物語を語る機会を与えることで，肯定的なアイデンティティの獲得につながる可能性があると述べる。イギリスとドイツの事例は，受刑者の番組制作が，実用的なスキル獲得と同時に，自分の内面に向き合い，自らの声を発信していく機会と認識されている。

オーストラリアでは，受刑者やその家族が参加するリクエスト番組が制作されており，地域住民も聴くことができる。住民にとって番組で紹介される受刑者らのメッセージを聴くことは，受刑者を一人の人間として認識し，刑事司法の問題に関心を寄せる機会となっているという。受刑者の番組参加はメッセージの投稿と音楽のリクエストを通してであり，受刑者が制作に関わるイギリスと比較したとき，参加形態は異なるが，自身の考えや意見を表明する機会のない受刑者が声をあげる機会を提供し，刑事司法に関する議論を喚起している点で意義がある（Anderson and Bedford, 2017）。

上記のような海外の刑務所ラジオに対して，国内の刑務所ラジオは形態が異なる。受刑者の番組参加は，聴取と番組へのリクエスト，メッセージの投稿に限られている場合がほとんどであり，多くが放送を所内に限定している。刑務所とメディアの関係史を概観した坂田（2019）によれば，現在多く見られる「DJスタイル」のリクエスト番組は，1979年に富山刑務所で放送が始まった「七三〇ナイトアワー」が先駆で，各地に広まっていったとみられる。坂田は，番組において，DJは「コメントは行わないか，行っても最小限に留めて」おり，受刑者のメッセージはいったん他者の言葉と声を借りて，本人へと循環していくという点で，番組は「自分自身の内面を見つめ続けなければならない『自己監視』の装置」（坂田，2019：119–120）だと述べる。坂田の調査は文献調査と数か所の刑務所ラジオ担当者へのヒアリングに留まり，各施設で番組を担当するDJによって態度が異なる可能性がある。実際，国内の刑務所ラジオは各施設の判断で実施されており，個々の取り組みの詳細は，法務省矯正局でも把握していない状態である。

たとえば，札幌刑務所で放送されている番組「苗穂ラジオステーション」について受刑者にアンケートを行った村崎（2018）によれば，受刑者からDJに対して「コメントが励みになる」「もっと厳しくアドバイスをしてほしい」などの意見があったといい，DJが番組で親身にコメントし，それが受刑者の心に響いている様子がうかがえる。

ところで，日本においても，収容者が制作過程へ関与する事例がないわけではない。例えば岡山刑務所で放送されているリクエスト番組では，受刑者がDJを務めている。過去にさかのぼれば，1962年に発刊された矯正施設などの関係者向けの専門雑誌では，久里浜少年院内の番組で，在院生が企画構成するコーナーが放送されていることが報告されている。誉田（1962）は，在院生が番組を積極的に聴取するようになったとしつつ，「矯正教育との結びつきが非常に希薄で，放送者側にはお道楽的な要素があり，聴く側には単に面白いから聞いているという態度」（誉田，1962：

２）があると述べる。

海外と比べて日本における受刑者の番組参加が制作過程への関与に広がらず，聴取とメッセージ投稿に留まる理由の一つに，所内番組が「矯正教育」「社会復帰支援」の目的を掲げつつも，その教育的意義が具体的に示されていないことがあると考えられる。先に触れた村崎の実施したアンケートにおいても，課題として，番組の意義を理解している職員が少ないことが述べられている。

日本において，刑務所ラジオに関する研究の蓄積がほとんどない中で，本稿では受刑者の番組への参加を起点に，DJや他のリスナーとのコミュニケーションから，活動の意義を考えていく。

2.3　自己を語る場としてのメディア

本研究では，刑務所ラジオにおいてリスナーがメッセージを投稿する，番組を聴くという過程をナラティヴ・アプローチの視座から考察する。人間の行為や関係を「物語」という視点からとらえ直すナラティブ・アプローチは，人文科学や社会科学の領域で近年，注目されている。ここで物語とは「２つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為」（やまだ，2000：147）を指すこととする。

メディア上ではさまざまな物語が行き交っている。たとえば，なにか不可解な事件が起きたときに，新聞やテレビは犯人がなぜこのようなことをしたのか，その動機を報じる。犯人はこれまでどのような人生を歩んできたのかを知ることで，私たちは，犯人がその行為に及んだ背景に思いを巡らす。この時，私たちは，ある事件をひとつの物語を通じて理解しようと試みている。このように，物語という形式は，不可解な現実を組織化して一定のまとまりをもったものとして現実理解を助ける（野口，2002）。私たちはメディアを通じて，日々さまざまな物語に触れる中で，この世界で起きていることを理解しようと試みているのである。

自己の成り立ちを考える上でも物語という形式は重要となる。Bruner（1990＝1999）は，自分自身に関する物語を語ることで自己はつくられていくと主張した。私たちは自分が何者であるかを説明するとき，自身の経験した人生のさまざまなエピソードのうち，あるものを選び出し，ある筋に沿って並べていく。このエピソードの選択と配列を通してはじめて「私」が現れてくる（浅野，2001）。そして，私たちは日々，自己を語り，自己物語を更新させながら生きている。

野口（2002）は，新たな自己物語が生まれる場として，コミュニティのもつ可能性に着目している。同じ問題や病気を抱えた人びとが集まるセルフ・ヘルプ・グループなど，多様な語りが出会う場では，誰かの語りが刺激となって，当人のこれまで語られてこなかったことが語られる可能性がある。そうして語られる「私」の物語は，他者によって聞き届けられることで，より確かなものとなる。その人は「人前で自分のことをそのように語った人」として，語る前とは違う存在になるのだ（野口，2002）。

「私」の物語は，メディアが形成するコミュニティを通じて立ち上がってくることもある。加藤（2015，2022）は，「メディア社会では，メディア表現行為を通じて，自己のアイデンティティが物語られ，物語られることで自己に輪郭が与えられる」とし，メディアを自己物語の場であるとする（加藤，2015：４）。また，小川（2015）は，地域メディアが，人びとが物語を交わし合う「ひろば」としての役割を持つと述べる。ひろばは，自分の物語が誰かに影響を与えると同時に，「日常生活では出会わないような他者（強者，弱者を含む）の経験や想いの物語を想像力でもって聴くことで他者の世界の理解を試み，同時にその物語の群れから自らが生きていく上で参照できそうな物語を選び取ってゆく」（小川，2015：54）のである。

自己の物語を語り，他者の物語に触れる場としてのメディアの一つに，ラジオのリクエストプログラムがある。真鍋（2007）は，番組にメッセー

ジを送ることは，音楽によって喚起される記憶をたどって，自らの人生を懐古し，意味づける過程であり，同時に話題提供者として番組に寄与することであると述べている。記憶の懐古は，記憶に紐づく感情の喚起であり，その感情はメッセージを通じて，番組を聴いている他のリスナーにも伝播していく。ここで「聴く」という行為を通じて番組に参加しているリスナーたちも，また「語り手の言葉を触媒にして，自分自身と語っている」（藤竹，2009：71）のである。このように，ラジオには，リスナーが他者の物語に自分の人生を重ね，自己の物語を作り上げていくことを促す機能があるといえる。そして，DJと他のリスナーは語られた自己物語を承認してくれる存在である。

刑務所ラジオに寄せられる受刑者のメッセージには，それぞれの人生の経験や日常の出来事がつづられており，自己物語の要素が含まれている可能性がある。そして，受刑者という同じ境遇にいるリスナー同士の内にあるそれぞれの物語が番組を介して出会うことで，更生に向かう新たな自己物語が立ち上がってくる可能性もある。そこで，本稿では，刑務所ラジオにおいて受刑者の番組聴取，メッセージ投稿が自己物語の構築につながる可能性について，受刑者へのインタビューと実際の投稿内容から検討する。

2.4　メディアにおけるケア・コミュニケーション

「ケア（care）」とは，世話，配慮，関心といった意味があり，近年，メディア研究においてもケアの概念が導入されつつある（林，2011，小玉，2012，引地，2020）。林（2011）は，マスメディアの倫理観として，「ケアの倫理」に基づくジャーナリズムを提示した。心理学者キャロル・ギリガンによって世に問われた「ケアの倫理」は，人間関係やつながりを重視し，誰一人として取り残さないという「包摂」の理念であり，〈他者のニーズにどのように応答すべきか〉という問いかけが重視される。小玉（2012）は，メディアが媒介するコミュニケーションにケアを位置づけ，あるメディアが「ケア・コミュニケーション」になるかどうかは，その内容が心の回復や癒しにつながるかどうかで決まると述べている。どのような内容が心をケアするかは，状況や人によって異なる。一般的には，他者の自分への共感や理解が必要であり，共通体験によってもたらされることもあれば，共通体験はなくても他者の状況を慮ることができる専門家などの人びとによってもたらされる。メディアの中でもラジオに注目した金山（2020）は，コロナ禍で人とのコミュニケーションがままならないときに，ラジオを通じたDJとリスナー，リスナー同士のやり取りが不安や孤独を軽減させたことを例に，ラジオの特徴であるインタラクティブなコミュニケーションが，ケア・コミュニケーションを実現させると述べている。

メディアを自己物語の場としてとらえたとき，語り手が自己の物語を語ることが慰めや癒しにつながっていくことも考えられる。加藤（2022）によれば，人はメディア空間において非対面や匿名の利点を生かしながら自身の物語を無条件で受け容れてくれる他者に対して，自己を語ることで，自己物語の再構築を試みる。そうして見出された自己の再生という希望は，幻想に終わることもあれば現実世界に向かって走り出すこともある（加藤，2022：186）。

刑務所ラジオにおいて，リスナーが自己の物語を語ることが慰めや癒しとなり，自身の生活や人生に対する前向さや希望を持つことにつながっていくとすれば，それを可能にするものは何か。そのような視点から，本研究では，DJとリスナー，リスナー同士のコミュニケーションを考察する。

3　研究対象・研究方法

本研究は，愛知県豊橋市にある女子受刑者を収容する名古屋刑務所豊橋刑務支所で月に1回，放送されているラジオ番組の事例調査による。この

「リクガメ」は2010年10月に開始された50分間の番組である。DJを務めるのは，地元の「やしの実 FM」（エフエム豊橋）のパーソナリティの渡辺欣生氏（男性，50代）と，出所者の社会復帰をサポートする保護司の村松史子氏（女性，70代）の２名で，いずれも同支所がある地域の住民で，ボランティアで活動する。収録は「やしの実FM」のスタジオで毎回行われ，放送は毎月第２土曜の午前８時10分から同９時ごろまでとなっている。受刑者は各々の居室で身支度などを行っており，各居室に設置されたスピーカーから番組が流れる。番組を聴きたくない場合は，職員に声をかけてスピーカーを切ることもできる。メッセージは，毎月のテーマに沿って，A４サイズ紙の両面に記入できる形式となっており，文字数の定めはない。

2021年９月10日にDJの渡辺氏（計54分，オンラインにて），同月25日に村松氏（計53分，やしの実FMにて）にそれぞれ半構造化インタビューを行った。また，リスナーの聴取状況を把握するため2022年６～７月に，受刑者及び未決拘禁者を対象に質問紙調査を実施した。受刑者は全員女子であり，年齢層は20代～70代以上で，平均年齢は50.1歳である。未決拘禁者とは，裁判で刑が確定する前の被疑者・被告人であり，女子と男子を含む。質問項目（全10項目）は，過去の調査（村崎，2018）の結果に基づいて検討し，作成した。配布・回収数は182部（受刑者155，未決拘禁者27）で，有効回答数は166部（有効回答率 91％）であった。その後，2022年11月18日に豊橋刑務支所にて，番組の聴取経験がある受刑者６名（A～F，40～70代，罪名は詐欺，窃盗，覚せい剤取締法違反のいずれか）に対して，半構造化インタビューを行った（計90分）。倫理的手続きは，調査の目的を説明し，学術研究以外でデータを使用しないことを約束し，調査協力の同意を得た。なお，調査への協力は任意のため，受刑者に対する質問紙調査，インタビュー調査といずれにおいても，番組を好意的に聴取している者が積極的に回答している可能性があることに留意されたい。

DJと受刑者へのインタビュー結果は，質的研究法の１つ，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて分析を行った。M-GTAは，人と人が直接的にやり取りする社会的相互作用に関わる研究，対象とする現象がプロセス性を有する研究に適している（木下，2003）。本研究では，受刑者が番組聴取を通じてDJや他のリスナーと交流するプロセスにおいてどのような体験を得ているのかという個人的な経験を分析するため，M-GTAによる分析が有効だと考えた。

４　結果

4.1　番組参加の傾向：質問紙調査から

「リクガメを聴いたことがあるか」の質問（有効回答数：166）では，聴取経験があったのは80％（n＝133）だった。番組を聴いたことがある者のうち，番組を聴く頻度（有効回答数：130）は，「毎回」87％（n＝113）が大半を占め，「たまに」13％（n＝17）であった。番組は受刑者に広く認知され，積極的に聴取されているといえるだろう。

リクエストの経験の有無（有効回答数：132）は，「ない」68％（n＝90）が，「ある」32％（n＝42）を倍以上上回り，「メッセージの投稿」を通じた番組参加よりも，「聴く」ことを通じて参加しているリスナーが多数を占めていた。「ある」と回答した者にリクエストをした理由（複数回答，有効回答数：42）を尋ねると，「自分の好きな曲・思い出の曲を聴きたい」39件が最も多く，「自分の書いたメッセージをDJに読んでほしい」26件と続いた。「その他」６件の自由記述欄では，「他の受刑者のメッセージに励まされたので，誰かの励みになればと思い応募を始めた」「特殊な世界

の出来事はなかなか社会で話す事ができないので，ここで吐き捨てて前に進んでいけたら」などの回答があった。「リクエストした曲が流れたことがあるか」の質問（有効回答数：41）は，「ある」73％（n＝30），「ない」27％（n＝11）だった。リクエストが採用され，メッセージを読まれた感想（複数回答，有効回答数：30）で，多かった回答は「好きな曲が聴けて嬉しかった」26件，「DJのコメントがうれしかった」24件が並んだ。「その他」６件の自由記述欄では，「分かってもらえた時の嬉しさ」「聴いてほしいお話が沢山ありすぎて書ききれません」などの回答があった。リスナーがメッセージを投稿するのは，リクエストした曲が聴きたいという理由だけでなく，メッセージを通じて自身の置かれた環境や境遇に理解を示してくれるDJや他のリスナーとの交流を望んでいる様子が見えてきた。

一方で，メッセージを投稿するリスナーは，自身の思いや考えを文章としてまとめるだけの感情表現能力や言語能力を有しているともいえ，リスナーの中にはそうした能力を十分に有していない（と本人が思っている）者が一定いるとみられる。リクエスト経験が「ない」者にリクエストをしない理由（複数回答，有効回答：84）をたずねると，「メッセージに書く内容が思い浮かばない」が43件と半数近くを占めた。「その他」28件の自由記述欄では，入所して間もない（５件），刑務所の規則上の理由でリクエストを送ることを許可されていない（４件）といった物理的な制限を除いて，「うまく文章を書けないから」（４ 件）が多かった。このことから「聴く」ことに専念しているリスナーの中には，メッセージを書くことに困難さを感じている者が一定いることがわかった。

4.2　DJへのインタビュー

DJ２名へのインタビューから21個の概念を生成し，６個のカテゴリーに統合した。【　】で囲んだカテゴリーごとに，〈　〉で示した各概念を用いて説明し，ストーリーラインを記述する。

【受刑者の環境】

受刑者は，インターネットの利用は許されず，テレビの視聴やラジオの聴取も時間が定められているなど〈**メディア利用の制限**〉が課せられている。刑務官と受刑者，また受刑者同士の自由なコミュニケーションは〈**厳格な規律**〉によって制限されている。DJ２名のうち村松氏は保護司としての経験の中で，出所者が直面することになる〈**社会の無理解**〉を感じてきた。

【番組を通じた社会復帰支援】

番組が放送目的として掲げる受刑者の社会復帰支援につながる要素を示している。DJはリスナーが「言いたいことを言える」（渡辺氏）ような語り掛けを意識しており，メッセージは文字数の制限を設けないなど，〈**自由な表現**〉を促している。実際に寄せられた内容からメッセージを書くという行為が受刑者にとって〈**自己省察**〉の機会になっていると考えている。また，〈**出所後の生活への希望**〉を抱いてもらうようなコメントを意識し，社会復帰に向けて動機を高めようとしている。番組構成はリスナーに関心を持ってもらうために，テーマを「私の得意技」「私の好きな刑務所の食事」にするなど〈**楽しい話題の選定**〉を意識しつつ，矯正教育に関わる宗教家の説法なども入れ，番組全体として〈**硬軟を織り交ぜた構成**〉にしている。

【DJの態度】

DJが意識しているリスナーに対する態度を説明している。聴き手が音声のみから話し手の人柄を想像するという〈**音声メディアの特性**〉を意識しつつ，〈**友人のような存在**〉として率直な思いをぶつけてもらえるよう，笑いを交えた「重くない」（渡辺氏）トークを心がけている。また，メッセージに対するコメントを通じて〈**受刑者への承認**〉を示し，リスナーが「自分を認めてもらえた」

と思えるような語りかけを重視していた。〈**虚実の超越**〉は，メッセージの真偽はわからなくても書かれた言葉を信じるという姿勢を示している。

【DJの変化】

DJの渡辺氏は，番組をきっかけに刑務所や受刑者とつながりを持つようになり，番組を継続する中で〈**番組作りのやりがい**〉を感じるとともに，受刑者に対する考えが変化してきた。個々のリスナーの経験や思いに触れ，〈**「犯罪者」に対する認識変容**〉を経験し，相手の事情や心中を想像しながらコメントを返す中で自らの〈**感情や言葉の深化**〉を実感していた。一方で，DJは番組をより充実させたいと考えているが，職員から〈**フィードバックの欠如**〉がある。

【リスナーの反応】

寄せられるメッセージには〈**家族への思い**〉を書いた内容が多い。受刑者は自由に音楽を聴くことができないが〈**音楽への思い**〉は強く，自分の好きな曲を聴きたいというのが番組参加の動機の一つとなっているとみる。また，他者の思い出の曲やメッセージを聴いたリスナーから，呼応した内容のメッセージが寄せられることもあり，DJは〈**リスナーの相互触発**〉を実感している。

【制作上の制約】

受刑者のメッセージは職員が内容に問題がないと判断したものがDJに手渡されており，個人情報保護の観点から個人名は出してはならないなど〈**刑務所側のルール**〉に基づき番組制作が行われている。番組を一般住民向けに放送する話も浮上したが，受刑者のプライバシー，被害者感情への配慮を考慮すると〈**一般放送のハードル**〉がある。

刑務所において受刑者は〈**メディア利用の制限**〉が課され，〈**厳格な規律**〉の中で他者とのコミュニケーションが制限されている。さらに出所した後も〈**社会の無理解**〉の中で生活を立て直していかねばならない。番組では，そのような環境にいる受刑者に対する社会復帰支援を掲げており，それは次の要素から成る。DJは受刑者に〈**自由な表現**〉の場を提供し，メッセージの投稿を通じて〈**自己省察**〉を促し，コメントを通じて受刑者に〈**出所後の生活への希望**〉を抱いてもらうよう働きかけている。継続的に聞いてもらうために〈**楽しい話題の選定**〉を意識し，番組全体として〈**硬軟を織り交ぜた構成**〉にしている。またDJは〈**音声メディアの特性**〉を意識しながら，リスナーにとって率直な思いをぶつけられる〈**友人のような存在**〉であろうとしている。DJの受刑者への態度は，書かれた言葉をそのまま信じるという〈**虚実の超越**〉と，コメントを通じて〈**受刑者への承認**〉を示そうとする姿勢がみられた。番組制作を続ける中で，DJは〈**番組作りのやりがい**〉を感じており，〈**「犯罪者」に対する認識変容**〉や〈**感情や言葉の深化**〉といった自身の変化を実感している。番組をより良いものにしたいという思いがありつつ，刑務所職員らからの番組に対する〈**フィードバックの欠如**〉がある。また，DJは番組を通じて受刑者の〈**家族への思い**〉や〈**音楽への思い**〉に触れ，〈**リスナーの相互触発**〉も実感している。番組を制作する上では〈**刑務所側のルール**〉など一定の制約があり，地域向けに放送する話もかつて浮上したものの〈**一般放送のハードル**〉がある。

4.3　受刑者へのインタビュー

次に，受刑者６名へのインタビューから生成された16個の概念と６個のカテゴリーについて説明し，ストーリーラインを記述する。

【番組参加の動機】

リスナーが番組の魅力をどうとらえているかを示している。聴取という観点では，リスナーにとって番組で紹介されるメッセージは同じ受刑者が投

稿しているため，他のメディアに比べて〈**身近な話題**〉である。メッセージの投稿という観点では，メッセージに対するコメントを通じて〈**DJの承認**〉を求めていることが示された。

【娯楽による気分転換】

番組では社会復帰や更生というテーマに直接結びつかない話題も取り上げられおり，笑いを誘うような話や音楽を聴くという〈**娯楽による気分転換**〉も，受刑者にとって日々の活力となっている。

【自己省察から自己表現へ】

リスナーはメッセージを書く，他者のメッセージを聴く，曲をリクエストする，他者のリクエストした曲を聴くという過程において，〈**記憶の懐古**〉を経て，過去の経験を現在の視点から意味づける〈**自己省察**〉を行っている。さらに自身の中で沸き上がった思いや考えを他者に対してメッセージを通じて示す〈**自己表現**〉の機会になっている。

【他者とのつながり】

リスナーは他者の投稿したメッセージを聞きながら「こういう風に思っている人もいるんや」(B，40代女性）と〈**他者への想像**〉を膨らませている。その中で，「生活している中で同じように戦っている」(A，70代女性）などと〈**他者への共感**〉を抱き，励まされている。リスナーは他者のメッセージの内容の真偽は問わず，想像の中の他者に対して共感を見出すという〈**虚実の超越**〉が示された。

【刑務所の特殊性】

受刑者の置かれた一般社会とは異なる生活環境が，番組聴取にどのように影響しているかを示している。テレビやラジオの視聴は時間が決められている上，受刑者によってはテレビの視聴がまったく認められないなど〈**メディア利用の制限**〉がある。塀の中の生活は，季節の変化や時の流れを感じにくく，月１回の番組聴取が〈**時間経過の実感**〉につながっている。番組で取り上げられる話題によって，刑務所の外側（社会）に対して内側（塀の中）にいるという〈**内と外の認識**〉を深めている。

【コミュニケーションの形式】

受刑者が対面，またラジオを通じた他者とのコミュニケーションをどのようにとらえているかを示す。受刑者の中には「ここにいると（他の受刑者と）一体化しないといけないという暗黙のルールがある」(B，40代女性）というように〈**画一性の強制**〉を感じ，〈**直接的・対面のコミュニケーションの困難**〉を抱えている者がいる。番組で紹介されるメッセージはラジオネームを使用するため〈**間接的・匿名によるコミュニケーションの促進**〉がみられた。メッセージの投稿はせず聴取のみをしている受刑者の中には〈**書くことへの苦手意識**〉を持っている者もいた。投稿した経験のある者の中にも，かつて同様の意識を持ちながら刑務所の中で教育プログラムを受けるうちに「文章力がついて(中略)リクエストもできるようになった」(D，40代女性）という者がいた。

受刑者にとって番組参加の動機は，聴取という点では〈**身近な話題**〉が取り上げられることであり，メッセージ投稿という点では〈**DJの承認**〉を求めていた。リスナーは番組にメッセージを書く・他者のメッセージを聴く，曲をリクエストする･他者のリクエスト曲を聴くという過程で，〈**記憶の懐古**〉から〈**自己省察**〉を経て，〈**自己表現**〉をしている。他者のメッセージを聴きながら〈**他者への想像**〉を膨らませ，〈**他者への共感**〉を抱いており，そこには〈**虚実の超越**〉がみられた。また，番組で紹介される音楽や笑いを誘うような話は，受刑者にとって〈**娯楽による気分転換**〉の機会となっており，刑務所という〈**メディア利用**

の制限〉された空間で，番組聴取が〈**時間経過の実感**〉，刑務所の〈**内と外の認識**〉につながっていた。また，集団における〈**画一性の強制**〉がある中で，〈**直接的・対面のコミュニケーションの困難**〉を感じている者がおり，番組による〈**間接的・匿名によるコミュニケーションの促進**〉がみられる。一方で，〈**書くことの苦手意識**〉からメッセージの投稿をせず，聴取のみという者もいる。

5　考察

インタビューの分析から，番組を「想像の他者と出会う場」「自己の省察・表現の場」ととらえ，どのようにしてケアにつながるのかを考察する。

5.1　想像の他者と出会う場

受刑者の中には直接的・対面での他者とのコミュニケーションに困難を感じている人がいた。「自分はこういうことを本当は人に言いたいけど，人にいうてその反応がめんどくさい，怖いし邪魔くさい」(B，40代女性)，「刑務所の中は怖いっていうのがあって，一人の先生（職員）に話したいと思っても他の人が聞いているから言えない」（C，40代女性）などと，他者に心の内を明かすことへの抵抗感が示された。そのような中で，ラジオ番組のコミュニケーションの間接性・匿名性が他者と関わることへのハードルを下げ，番組が受刑者にとって，想像の他者に出会う場になっていると考えられる。

受刑者の中には，自身が刑務所に入っているという現実，そこでの生活を受け容れることへの抵抗から，他の受刑者と距離を置こうと葛藤している過程で，ラジオの聴取を通じて他者とのつながりを感じた者もいた。

一番初めはなんでここにきたんだという，現実が受け止められなくて，刑務所に慣れてはいけないと思った。でもそしたら苦しくて。人ともあんまり近すぎず，私は違うんだと思ったり。でもリクガメは聴いているうちに面白いなって思って。（中略）館内のことがわかるから。私ひとりじゃないんだっていう気持ちになる。心を閉ざしている時も他の人の話を聞いて楽しかった。

（F，40代女性）

ここにいると他の受刑者と一体化しないといけないという暗黙のルールがある。刑務所の生活を普通と思いたくない，何も面白くないけど，（他の受刑者から）それを面白くない子はいらんってなる。でも，ぐれずにやっていますって（メッセージに）書いたんです。（DJの）渡辺さんやふみちゃんから「慣れちゃわないで，そのまま帰ってね」って言われて，そうかそれでいいのかと思った。

（B，40代女性）

番組を介して，他のリスナーの存在を想像することで「ひとりじゃない」と思える。Ongは，話しに耳を傾けるということは，聴取者を一つの集団，一つ現実の聴衆につくりあげると述べ，ラジオなどの電気通信技術による「二次的な声の文化」は「強い集団意識group sense」を生み出すと指摘している（Ong, 1982＝1991)。「リクガメ」のリスナーも番組を聴くことが，集団への所属感につながっているといえる。そのことが安心感をもたらすこともあれば，一方では，「受刑者」という集団ゆえに，現実を受け入れることをためらう者にとっては聴取の回避につながる可能性もある。

他のリスナーの存在とともに，DJのコメントも重要である。リスナーはDJのコメント内容から自分への配慮を感じるとともに，DJの声そのものに励まされる。北村日出夫は，ラジオから聞こえる《声》は，《顔》と同様に「固有名詞」的であり，身体性を保持し，人間を提示すると指摘する（北村，1999)。刑務所で家族や友人らとの関りが制限されている受刑者にとって，声という生身の人間を想起させるコミュニケーションが，

孤独な日々での慰めになっていると考えられる。

5.2　自己の省察・表現の場

受刑者はメッセージを書く過程で，「こういうことが言いたかったんかな，自分は」（B，40代女性）と自分の感情に気づき，「素直な思いを書けるようになったと実感するし，（文章の）組み立て方がわかってきた」（D，40代女性）と他者に対する感情表現の仕方を身に着けつつあった。また聴いているだけのリスナーも，他者の投稿やDJのコメントを媒介に心の内でさまざまな感情を巡らせていた。番組への参加をきっかけに，これまでの人生を振り返りながら，現在の生活，出所後の生活について考える。その過程が個々の自己物語の構築につながっていくと考えられる。

5.2.1　投稿を通じた自己物語の構築

実際に番組に投稿されたメッセージからも，リスナーにとってメッセージを書く行為は，自己物語を語る行為であるととらえることができる。リスナーはメッセージを書く過程でこれまでの人生で経験してきたさまざまな出来事の中から特定の出来事を選び出し，並べ直して，筋の通る物語として再構成している。たとえば「花」というメッセージテーマに対して，ある受刑者は我が子からの手紙に歌詞がつづられていたNOBUの「いま，太陽に向かって咲く花」[(1)]をリクエストした。

リクエストはNOBUの「いま，太陽に向かって咲く花」なのですが，実はこの曲，聞いたことがありません。知らない曲をリクエストしたんですね。子どもたちがくれる手紙の中に時折，歌詞が入っており，その中に花関係のものがいくつかありました。その中の一つです。（中略）どんな思いで書いてくれたかと思うと胸が苦しいです。この殺伐とした空間の中にいると，普通は外にいると気にも留めない花や音，歌や季節の音，鳥の声，人の声などが愛おしく感じます。（中略）これから何ができるか，今まで生きてきた何でも背負ってしまう考えを捨て，いいところってみんなが言ってくれるところはなくさず，日々頑張ります。一日も一日も早く帰れるように，子どもたちにたくさんの花を咲かせてあげられるように，祈らずにはいられません。どうか子どもたちが書いてくれた曲の一つを聞かせてください。

（「リクガメ」，2021年４月放送回）

「花」というテーマから，我が子とのやり取り，生活の中でのささいな癒しの瞬間を連想し，現在の生活に励むことで，子どもとともに過ごす未来へとつなげていきたいとの思いが構成されている。

また，「わたしのふるさと」というテーマで，ある受刑者は LiSAの「炎」[(2)]をリクエストした。

私は幼いころから両親がおらず，父方の祖父母に育ててもらったため，祖父母の存在が私にとってのふるさとです。（中略）私には帰れるふるさとというものがありませんが，祖父母は私の中に生き続けてくれているので，私のふるさとは私の心の中にあるのだと思っています。（中略）大切に育ててもらったというのにその思いを裏切って，五回も刑務所に入り，お盆にお墓参りにも行けない親不孝者の私。お盆の送り火と迎え火のかわりに，LiSAの「炎」をリクエストします。この曲の「強くなりたいと願い泣いた決意のはなむけに」という歌詞に，もう再犯を繰り返さないという決意を込め，祖父母にささげたいので是非お願いします。

（「リクガメ」，2021年８月放送回）

「ふるさと」というテーマに対して，場所や土地ではなく，亡くなった祖父母の存在を挙げ，刑務所にいて行動を制限された自分と結びつけて，自身を「お墓参りにもいけない親不孝者」だと省みている。

物語るという行為は，バラバラになっている出

来事を「筋立て」し，理解可能な全体として編成し直す作業である（Ricœur, 1983）。上記の２つのメッセージからは，メッセージテーマに加え，リクエスト曲が，自己物語を語る上での「筋立て」を手助けしている様子も見えてくる。松本（2005, 2019）によれば，思い入れのある音楽を語ることは，当人にとって重要な出来事や他者の存在を想起させ，新たな語りを生む。さらに他者との対話において，言葉に比べて意味のあいまいさを持った音楽を媒介することで，語り手と聞き手の内に新たな意味が生み出されるという（松本, 2005, 2019）。所内番組におけるリクエスト曲は，投稿者が自己の物語を語る手助けをするとともに，他のリスナーにとっても曲にまつわる出来事について改めて思いを巡らせるきっかけになるといえる。

5.2.2　他者からの承認

自己物語が語られるとき，それを聞き届けてくれる人がいなければならない（野口，2002）。番組では，その物語を受け取る他者がDJであり，他のリスナーである。DJは受刑者のメッセージに対して，「自分を認めてもらえた」と感じてもらうようなやり取りを重視していた。

（受刑者は）自分の言ったことに対して私たちが何らかの答えを出しますよね。多分，勇気づけられると思うので。（中略）やりとりしながら自分のことについて，これだけ語ってくれるっていうのは私達からすると誰なのか分かりませんけどね。それは存在を認めてもらったと思うんじゃないでしょうかね。これは確信していますけど。

（村松氏，2021-9-25 インタビュー）

このように相手への承認を基本とするこの番組のDJの姿勢は，受刑者がメッセージを投稿する動機にもつながっているとみられる。

ただし，ここで注意しておきたいのは，受刑者の寄せるメッセージの内容，語られる自己の物語には，事実とは異なる内容が含まれているかもしれない。実際に受刑者やDJへのインタビューでもその可能性が指摘された。自己物語論では，語られた出来事が事実か想像か，真実か偽りかは問われず，むしろ出来事の並べ方，物語の構成に関心が払われる（Bruner，1990＝1999）。番組においても，DJは「書いてきたことを信じてやる。うそだと言って向かっていったら誰も本音は言わない」（村松氏）という姿勢であり，書いてある内容が実際とは異なっているとしても「本当にそうなるように」との思いでコメントしているという。

また，DJだけでなく，リスナーである受刑者も他者のメッセージの真偽を問わない様子がみられた。「嘘を書いているっていうよりも，自信はないけれどそういう気持ちが全くないわけじゃないんだと思う」（C, 40代女性）という解釈や，「嘘でもほんとでもいいんです。（中略）感動させてくれればいい」（E，60代女性）と想像上の他者に共鳴して自分の心が動く瞬間をむしろ重視していた。受刑者も他者のメッセージの真偽はわからずとも，書き手の思いをさまざまに解釈していた。このようなDJや他のリスナーの「他者の語る物語を無条件で受け容れる」（加藤，2022：185）態度が，メッセージの書き手に対して，自身の人生に対する願望や希望を含めて自己を物語ることを促していると考えられる。

DJとリスナー，リスナー間の承認を基本としたコミュニケーションからは，二つのレベルのケアが見えてくる。第一に，物語として語られる自己が肯定されることでのケアである。それはたとえ更生につながる物語でなくても，語り手に対して自己を肯定される喜びや安心感を与える。第二として，物語が語り直される中で，語り手がより良く生きるための新たな物語が立ち上がってくる可能性が挙げられる。Maruna（2001＝2013）は，罪を犯した者が再犯をしない状況を維持するためには「彼らの波乱に富んだ過去が，どのようにし

て，現在の立ち直ったアイデンティティへとつながっているかを（自分と他人に対して）説明するために，一貫した信用に足る自己物語を必要とする」（Maruna, 2001＝2013：19）と指摘する。犯罪を継続している者としていない者の自己物語を比較したときに，前者は置かれた環境のために自分を変える力はないと感じているのに対して，後者は過去の意味をとらえ直し，「これまで経験してきたすべてのおかげで，私は今，こんなふうに新しくなれた」とポジティブに転換し，自身の人生に対する主体性を獲得していたという。このように自己物語は，語り直されることによって，犯罪を断ち切った自己に向かう可能性もある。このとき，語られる物語を聞き届け，承認するというDJや他のリスナーの行為は，語り手が犯罪や暴力の連鎖を抜け出す手助けとなるケア・コミュニケーションとして位置づけられると考える。

5.2.3　聴取を通じたケア・自己物語の構築

このように自己の物語を語り，他者に承認されることがケアにつながる可能性がある一方で，聴き手である他のリスナーも，DJもその物語を受け取ることによって，ケアされているといえる。リスナーは他者のメッセージ，それに対するDJのコメントを媒介に心の内でさまざまな感情を巡らせていた。「みなさんの声を聴くのが楽しい。いろんな考えがあるんだなぁと。面白い話も，生活している中で同じように戦っているんだとか」（A，70代女性）などというように，他者のメッセージに自分を重ねていた。この過程は，聴いているだけのリスナーが他者の自己物語を参照しながら，自身の物語を作り上げていく過程だともいえる。

また，DJも単にケアを与える側として存在しているのではない。DJ にとって「一生懸命書いては消して，消しては書いて」（渡辺氏）を繰り返されたメッセージを受け取ることは，作り手としてのやりがいにつながっている。リスナーによって役割を与えられ，DJとしての存在価値を感じている点で，ケアされる側でもある。

普段，番組やっていてもそんなに濃い内容のメッセージ，書き直してみたいなメッセージは来ないものですから。（中略）いろんな考えに触れることによって，この人は何を言いたいのだろうとか，そういう「リクガメ」をやっていなかったら感じられなかった感情とか答え方っていうのは，絶対に生まれていると思います。とにかく，そんなことがあるんだっていうような経験をしていらっしゃる方も結構いらっしゃるので。

（渡辺氏，2021-9-10インタビュー）

このように DJの渡辺氏はメッセージに対して，どう受け止め，どう返すかを考えることで，自身の考えや言葉の深まりを実感していた。 このことは受刑者に対する認識の変容にもつながっている。もともとは「犯罪者は犯罪者」という思いがあったが，「僕たちと同じような言葉を使い，同じような考えを持っていて，何か踏み外して，こういう運命になってしまった」と考えるようになり，罪を犯した人びとに対して，その犯罪的な側面だけでなく，個々の人間性に思いを至らせるようになったという。DJ自身も受刑者のやり取りの中で，これまで生きてきた中で培った考えや価値観の省察と刷新を行っているといえる。

DJは自身の経験から，仮に番組が所内だけでなく，所外に放送されて地域住民が聴くことができるようになれば，受刑者に対する偏見や差別の解消につながる可能性も実感していた。一方で，所外に放送するにあたっては，被害者感情，厳罰的な市民感情への配慮が必要となる。したがって，番組で紹介するメッセージも，広く一般の人に受け入れられる内容を選別していくことになるだろう。DJは，番組内で受刑者に率直な思いを表現してもらうことを重視しており，外部の不特定多数の人が聴いていることを意識して「言いたいこ

とが言えないのは，本末転倒」（渡辺氏）になるという考えであった。自己物語の構築という視点からみれば，語り手が「他者からの評価と査定」を意識することで，語りに一定の枠がはめられ，「無難な語り」の生産につながる（野口，2002）。放送を所内に限定した番組では，メッセージの選別過程におけるDJからリスナーへの評価と査定は存在するものの，番組の放送を所内に留め，評価と査定を下す他者が不特定多数となることを回避することで，新たに生まれる物語もあると考えられる。

6　本研究の意義と課題

刑務所ラジオはリスナーにとって自己を省察し，物語る場となりうるのかという本研究の問いに対し，リスナーはメッセージの投稿を通じて自己を物語り，他のリスナーもその物語を聴きながら思いを巡らせ，自らの物語の種としている可能性が示された。それを可能にしているのが，メディアという非対面，匿名の空間において出会う他者から捧げられる「承認」であった。番組のコミュニケーションは，受刑者が語る自己を肯定することで喜びや安心感を与えるとともに，語り手がより良く生きるための新たな自己物語を構築する可能性を有しているという点で，ケアとして位置づけることができる。本研究の意義は，メディア上における，自己を語る行為とケア・コミュニケーションの接続点として，物語として語られた自己に向けられる他者による無条件の承認という行為を示したことにある。

ただし，本研究は受刑者の語りの変化の過程を分析したものではないため，番組で自己物語が語り直される中で，実際に更生に向けた物語が立ち上がっていると明示するには，さらなる研究を要する。またメッセージの中には，自己物語の体をなさないもの，複数の出来事を筋立てるなどの痕跡がみられないものがあることも留意されたい。

書くことに困難を感じているリスナーに対しては，一言だけメッセージを添えるなど，投稿しやすい形式を考える必要もある。なかなかリクエストが採用されないリスナーに対する配慮も考えていかねばならない。筆者の調査した他の事例では，なるべく多くの人が採用されるよう，一人あたりのリクエストの回数を制限するケースもあったが，どのような形での配慮がより良いのかは検討を要する。刑務所ラジオという場を，自己物語を語る場，新たな物語を生みだす場とするためには，現状のプログラムの再検討も求められる。

本研究の限界として，受刑者に対する質問紙調査とインタビューでは，番組を積極的に聴取している者が回答しているため，番組の肯定的な側面が示されたと考えられる。一方で番組参加に消極的な受刑者がいる背景は十分に検討することができなかった。さらに，本研究は刑務所ラジオの一つの事例について，その可能性や意義を検討したものであり，各刑務所の番組はそれぞれDJの態度やリクエストメッセージの形式が異なるため，他の事例も含めて検討を進めていく必要がある。今後，異なる調査手法や分析方法を用いて，刑務所ラジオの機能を多面的に検討していくことは，受刑者の更生に向けた生活の向上にラジオが寄与することにつながると考える。

注

（１）NOBU（2017）『いま，太陽に向かって咲く花』ユニバーサルミュージック，UPCH-5916.

（２）LiSA（2020）『炎』SACRA MUSIC，VVCL-1752.

参考文献

Anderson, H.（2012）*Raising the Civil Dead: Prisoners and Community radio*, Peter Lang.

Anderson, H. and Bedford, C.（2017）*Theorising the many faces of prisoner radio: developing a*

holistic framework through process and product, Media International Australia Vol. 164(1), pp.92-103

浅野智彦（2001）『自己への物語論的接近－家族療法から社会学へ』勁草書房.

Bedford, C.（2018）*Making Waves behind Bars: The Prison Radio Association*, Bristol University Press.

Bruner, J.（1990）*Acts of meaning*, Harvard University Press.（岡本夏木，仲渡一美，吉村啓子訳,『意味の復権　フォークサイコロジーに向けて』，ミネルヴァ書房，1999.）

藤竹暁（2009）「ラジオは人間の鼓動を伝える」,『マス・コミュニケーション研究』74，pp.65-74.

林香里（2011）『〈オンナ・コドモ〉のジャーナリズム　ケアの倫理とともに』岩波書店.

引地達也（2020）『ケアメディア論―孤立化した時代を「つなぐ」志向』ラグーナ出版.

誉田賢三（1962）「自主放送の現状と反省」,『矯正研究論文集Ⅱ』２号，pp1-2.

Human Rights Watch（1995）『*PRISON CONDITIONS IN JAPAN*』〈https://www.hrw.org/reports/1995/Japan.htm〉（参照日：2023年10月30日）

金山智子（2020）「ケアメディアとしてのラジオ―コロナ禍に求められるケア・コミュニケーション」,『情報科学芸術大学院大学紀要』12，pp.78-86.

加藤晴明（2015）「自己メディア論から地域の自己メディア論へ」,『中京大学現代社会学部紀要』９巻１号，pp.1-32.

――――（2022）『メディアと自己語りの社会学』22世紀アート.

Kiernan, G（2021）*Exploring Prison Podcasts: Storytelling as a means to Recovery*, University of Twente, Master's thesis,〈http://essay.utwente. nl./85780/〉（参照日: 2023年10月30日）

木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い』弘文堂.

北村日出夫（1999）「ラジオ，二〇世紀のメディア意味空間の「原点」:《音･声》をモチーフに」,『マス・コミュニケーション研究』55．p29-43.

小玉美意子（2012）『メジャー・シェア・ケアのメディア・コミュニケーション論』学文社.

真鍋昌賢（2007）「ラジオと高齢者」，小川伸彦・山泰幸編『現代文化の社会学入門』ミネルヴァ書房，pp.233-249.

松本佳久子（2005）「ストレスマネジメントにおける音楽の可能性について―非行臨床における「大切な音楽」の語りから」,『更生保護』56巻10号，pp28-31.

――――（2019）「受刑者グループへのナラティヴ・アプローチの試み：「大切な音楽」の語りと沈黙における意味生成と変容」，音楽心理学音楽療法研究年報」48巻，pp4-7.

毛利真弓・藤岡淳子（2018）「刑務所内治療共同体の再入所低下効果―傾向スコアによる交絡調整を用いた検証」,『犯罪心理学研究』56巻１号，pp.29-46.

村崎誠三（2018）「苗穂ラジオステーションの取組について」,『刑政』129巻２号，pp.36-45.

野口裕二（2002）『物語としてのケア―ナラティヴ・アプローチの世界へ」医学書院.

小川明子（2015）「地域メディアとストーリーテリング―地域メディア研究のあらたな展開に向けて」,『メディアと社会(7)』，pp.43-60.

――――（2016）『デジタル・ストーリーテリング声なき想いに物語を』リベルタ出版.

Ong, W. J.（1982）*Orality and Literacy-The Technologizing of the World*（桜井直文，林正寛，糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』，藤原書店，1997）

Prison Radio International（2021）『*International Prison Radio Impact Report 2021*』〈https://pra.h2hprojects.com/wp-content/uploads/

Prison-Radio-International-Annual-Snapshot-2021-v3-lo-res-digital-single-page.pdf〉(参照日：2023年10月30日)

Ricœur, P.（1983）*Temps et Récit I*, L'intrigue et le récit historique, Seuil.（久米博訳，『時間と物語Ⅰ』，新曜社，1987.）

坂上香・アミティを学ぶ会編（2002）『アミティ「脱暴力」への挑戦―傷ついた自己とエモーショナル・リテラシー』日本評論社.

坂上香（2022）『プリズン・サークル』岩波書店.

坂田謙司（2019）「限定された空間とメディアの社会史研究に向けて―刑務所と「新聞」「ラジオ」はどのような関係を結んできたのか」，『立命館産業社会論集』54巻４号，pp.107-121.

Maruna, S.（2001）*Making Good: How Ex-Convicts Reform and Rebuild Their Lives*, American Psychological Association.（津　富宏，河野荘子監訳，『犯罪からの離脱と「人生のやり直し」―元犯罪者のナラティヴから学ぶ』，明石書店，2013.）

Wilkinson, K. and Davidson, J.（2008）: *An Evaluation of the Prison Radio Association's Activity: The West Midlands Prison Radio Taster Project*. The Hallam Centre for Community Justice, Sheffield Hallam University.

やまだようこ（2000）「人生を物語ることの意味―なぜライフストーリー研究か？―」，『教育心理学年報』39巻，pp.146-161.

安田恵美編(2020)「刑務所出所者等の意思決定・意思表示の難しさと当事者の声にもとづく支援」，『URP「先端的都市研究」シリーズ 18』